

『高島秋帆徳丸ヶ原調練図』について

宮 本 尚 彦

はじめに

高島秋帆による「火砲調練」は、天保十二年（一八四一年）五月九日に武州徳丸ヶ原で行なわれたが、当日の様子を極めてヴィジュアルに今日に伝える絵図が四点ほど残されており、また、これらの絵図を模写したものが数点ほど伝わっている。

次項にそれらを列挙して若干の解説を加えるように、本絵図に関しては、同じ題材（主題）を扱いながらも画面構成を異にするものがあり、細部において異なる情報を表現し伝達しようとした意図が推測される。しかも、それぞれには「贅」が記されており、絵画表現の理解を大いに助けている。

ところで、本所史料保存技術室に所属し、歴史資料の模写を担当している筆者もまた、本絵図の模写本を作成した経験がある。改めていうまでもなく、模写という営為にとつては、対象とする原本の正確な理解が不可欠の前提である。原本に盛り込まれている諸々の情報を読み解くことが必要なのである。

この様な意味から、模写という作業を進めるにあたって、本絵図は格好の素材といふべきである。そこで、本稿ではこの絵図群の紹介を兼ねて、絵図に描かれた内容を考察していくことにしたい。

その際に、分析の視点とするのは、以下の点である。

(一) 「調練」の実状が絵図のなかに、どのように表現されているか。

(二) どのような目的で作成されたか。

(三) 高島流砲術の伝播の過程で、どのような絵図及び「砲術業書」などの指図が作られたか。

まず、管見に及んだ絵図の諸本を紹介し、次いで「贅」に記された文字情報を析出し、それに画面に描写された情報を重ね合わせるといふ手順を採ることにしたいと思う。

一 諸本の紹介

まず、現在所在が確認できる絵図の原本類と模写類を列挙しておく。

〔原本〕群

高島秋帆徳丸原調練図(有坂純一氏所蔵 以下「有坂本」と略称する)

徳丸原火技練習図(古賀十二郎氏所蔵「古賀本」) 〔図1〕

徳丸原演武之図(長崎県立長崎図書館所蔵「長崎本」) 〔図3〕

徳丸原演砲御見分図(有馬成甫氏旧蔵「旧有馬本」) 〔図4〕

西洋火砲打方御見分之図(金沢市立図書館河野文庫所蔵「金沢本」)

※幕末の模本である。〔図5〕

(武州西臺於徳丸原) 高島流砲術稽古業書(試統一見録)(稿本)

(絵入) 附彩色絵図(大東急記念文庫所蔵)〔図6〕

高島砲術訓練図(岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵)岡山大本)

〔図7〕

(参考図)

〔天保十二年五月徳丸原ニ長崎地役人高島四郎大夫打様之玉附図〕⁽¹⁾

(酒川玲子氏所蔵 横浜開港資料館保管)〔図8〕

〔模写〕群

〔有坂本・模写〕 東京大学史料編纂所所蔵 〔図1模〕

〔古賀本・模写〕 松月院所蔵(東京・板橋) 〔図2模A〕

東京大学史料編纂所所蔵 〔図2模B〕

〔長崎本・模写〕 長崎市立博物館所蔵 〔図3模A〕

板橋区立郷土資料館所蔵 〔図3模B〕

〔有馬旧蔵本・模写〕 松月院所蔵(東京・板橋) 〔図4模A〕

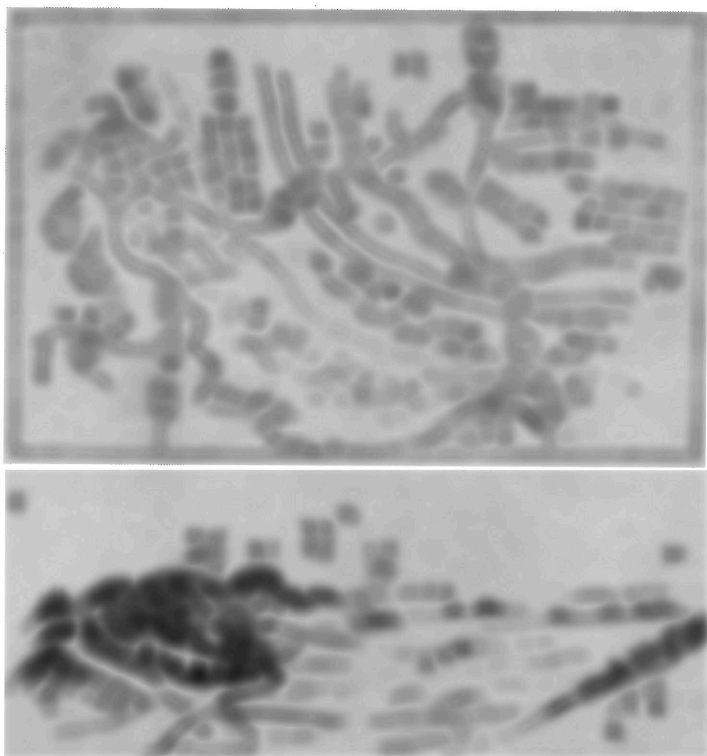
東京大学史料編纂所所蔵 〔図4模B〕

その他に「絵図」の存在は確認出来ないが、著書・記録などに記載されたものがある。⁽²⁾

二 絵図に描かれた「徳丸原訓練」

ここでは「有坂本」を中心として「訓練」の様子がどのように形象化されたか、を考察する。前記四図の原本群のなかでは「有坂本」が一番濃彩で描かれ、視覚化され、情報を読み易くしているからである。

先ず訓練が行なわれた徳丸ケ原の地形を考察する。図9⁽³⁾、図10⁽⁴⁾の二図を頭の中で合成して瞭に浮かべると、荒川沿岸一帯の平地が想像できはしまいか。当時徳丸ケ原は湿地帯であった。原一面に覆う草は、多分イ

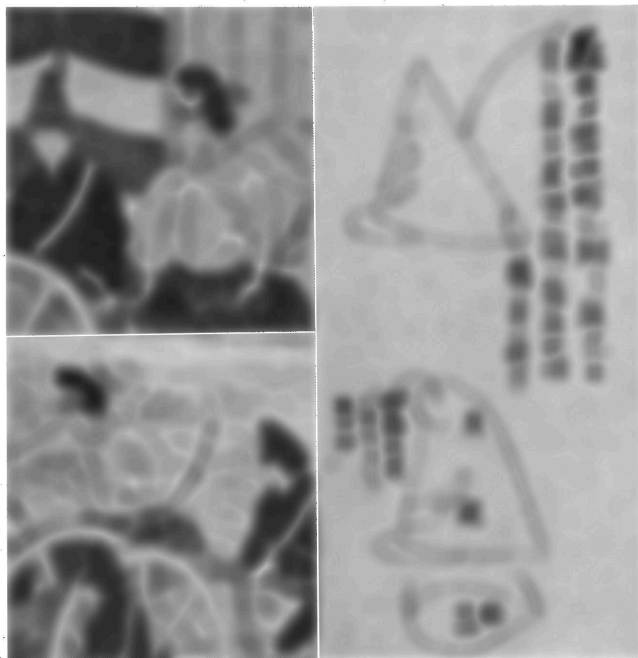


〔図9〕徳丸原附近図

〔図10〕上赤塚村附近の遠景

ネ科の多年草、戸田原に多かったが故に命名されたトダシバかも知れない。また草原のあちこちに緑青で点綴されているのはノウルシを想像させる。

絵図を一見して、先ず目に付くのは画面中央の銃砲隊の射撃による濛々たる黒煙である。黒煙の部分は油煙墨で描かれている。油煙墨のほう実感に近い表現ができたであろう。他の墨線の部分は、全て松煙墨によって描かれている。この図では広い範囲を画面に入れるために必然的



(図6) 右「試銃一見録」部分 トンキョ帽
左「有坂本」部分 (上) 高島秋帆 (下) 高島浅五郎

に俯瞰の視点から描かれている。西隅(右下)には五間の廠舎を構え、その南(左斜め上)の打小屋は廻りを外幕で囲い、モルチール砲とホウイッスル砲が配置されている。続いて(その左から中央)銃隊は横三列に構え、秋帆指揮する第一中隊、浅五郎指揮する第二中隊。この中隊(コンバグニー)の中間に置かれた野戦砲が発射され、黒煙が漂う。中隊の両翼の野戦砲から発射された砲煙も漂い、次の発射のために洗カルコ(洗銃箒)で巢中(砲口)を洗っている。右下の廠舎から中央・左上に連なる画面を斜めに分ける流れと、画面上辺から右に水平に横たわる廠舎とが相俟て、画面の動静・緊張を感じさせる構図となっている。更に図中央下に描かれた近藤雄藏による馬上射撃が一層演練の状況を盛り

上げ、臨場感あふれる実景を彷彿させる。下辺左下の「戸田川」には、「御用」の幟を立てた日除船が舫いでいる。右下の見物人は、老若の別も描き別け、その表情・動作まで個性的に表現され、砲術の威力に愕き、その騒めきが伝わってくるようだ。その他の細部も丹念に観察すると、この図が諸々のものをいかに細密に描いているかが解る。画面右下隅廠舎の廻りに張られた外幕は、幕串を立て幕の上端の手縄を通すための乳(チ)まで克明に描かれ、また右上辺には、立傘・毛槍、先箱の類まで丹念に描かれている。この絵図では調練当日の状況がほぼあますところなくかかっている。ただ画面の大きさの都合で、射撃目標の標旗は左端に四丁目印の吹流しが入っているだけで、八丁目印の標旗は見えない。

但し、描写上で、上辺の廠舎と上辺右端の幔幕で仕切られた見物人席との絵画的空間の関係が、技術的にみると整合性に欠けているようだ。ここでもうすこし詳細に人物を見てみよう。紙幅の関係で秋帆父子に限定したい。父・子とも服装はほとんど同じようにみえる。淡紅の筒袖に紺色の筒袴をはいて采配を持つ。筒袖には高島家の家紋である「四ツ目結」が文様として染められている。隊員たちの被っているトンキョ帽は円錐形で先端は尖っているが、秋帆父子のものは先端に丸みがある。秋帆のトンキョ帽の正面には三ヶ月の紋章があり、浅五郎のそれには日脚をデザインした紋章が付けられている。「試銃一見録」(図6)には、先端の円みのあるトンキョ帽は「四郎大夫バカリコレヲカブル」とある。

これらの服装・帽子等は、活動が自由にできるよう秋帆が考案したものである。井上左大夫の「報告書」に「鎗付小筒にて備打候節異体之服笠等用ひ(略)心得違之義と奉存候」と批判されているように、秋帆は、集団密集行動に適した軽便式のものを考案した。「試銃一見録・

彩色絵図⁽⁸⁾には銃卒が、筒袖の前身頃の打合せを卸で止めた図像が描かれており、かなり思い切った和洋折衷式のものだったようだ。

三 「賛」に記された「徳丸原調練」

本絵図は当日の調練の順序を「異時同図」として描いている。では、調練の次第がどのように一つの絵図として表現されているだろうか。

徳丸ヶ原での調練の順序は『陸軍歴史』⁽⁹⁾等にて「天保十二丑年五月九日武州西台徳丸ヶ原に於て砲術業書」として翻刻されている。本稿で取り上げる絵図(「有坂本」・「古賀本」・「長崎本」)にも上部に「賛」として掲げられている。

これら三図の「賛」は基本的な内容は共通している。然し、前記三図のうち「古賀本」と「長崎本」は同じであるが、「有坂本」は前二者との相違が、かなり散見される。部分的に字句を意識的に変えたと思われる表記が随処に出てくる。

管見によれば、「賛」の翻刻されたものは次の二書に収載されている。一書は、大坪武門「幕末偉人 斎藤弥九郎伝」(京橋堂書店、一九一八年)、もう一書は、遠藤早泉「高島秋帆」(健文社、一九四二年)である。前者には訓点が付されている。後者も読点が付けられているが、読点のとりかたに少し誤謬がありそうだ。

遠藤「前掲書」では、「賛」を撰したのは山本晴海であろうと推測する。⁽¹⁾

晴海の撰述になる「高島秋帆翁試砲于江府図記」が所謂これらの「賛」であるが、前記「有坂本」・「古賀本」の「賛」及び、大坪前掲書、遠藤前掲書の「賛」を比較すると四者共にそれぞれ部分的ながらもかなりの相違がある。

絵図に描かれた場面で「賛」のなかの対応する部分を簡条書きで示す。

- | | |
|----|------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 府之西北五里。名徳丸原。 |
| 2 | 原之西隅構廠五間。在南為放砲所。 |
| 3 | 内安臼砲長砲及長丸火藥等物。 |
| 4 | 但外繞以墨白相間布幕。 |
| 5 | 四町標旗一。俱紅白間幅。 |
| 6 | 原南三廠。連桁面東北。廠後俱繞以墨白幕。 |
| 7 | 西辺二間為監察水野舍人君。司礮井上左太夫君。田付四郎兵衛君。為徒士監某々。与力某々。 |
| 8 | 為内使吉川一学君。後藤周防守君。 |
| 9 | 東辺二間。為本多勢侯。酒井出雲侯。稻葉兵部少輔侯。稻垣若狹侯。加納遠江侯。*渡辺丹後侯。大田新六郎侯。加納大和侯。堀若狹侯。松平内匠頭君。石川美濃守君。 |
| 10 | 別張青幕者。為前肥前侯松浦静山翁。 |
| 11 | 間槍倚屋。 |
| 12 | 參差異色空馬就陰。遠邇相望。 |
| 13 | 観音堵立擁場三面。 |
| 14 | (吹螺一声)(臼砲三発) |
| 15 | (次放焰丸二) |
| 16 | (次放滾爆丸二) |
| 17 | (次放果丸) |
| 18 | 次銃騎一疋往還。放銃六発。且放且跑。 |
| 19 | 両隊挑銃。単行接歩。行必斉趾行軍。車砲三門。一在隊列。二分在隊兩端。全隊至官廠前。一字擺列脱卸。銃劍收拾腰。三門車砲交砲数発。 |
| 20 | 恒月銀紋犀頭髻笠淡紅窄袖胸腹窄筒藍袴。執麾在前者。第一隊長高島某源茂敦。 |

- 21 執拂在尾者。副長江戸市川熊男。
- 22 日脚銀紋尖頭髻笠執麾者。第二隊長高島浅五郎源茂武。
- 23 執策在尾者。副長野口善太夫。
- 24 往来弥縫者。游副長山本清太郎。
- 25 騎馬者。近藤雄藏。
- 26 三門車砲執事者。各四員。(以上「有坂本」の「賛」より抄録)
以下参加隊員の姓名が列挙されている。隊員数は資料によってかなり差がある。では、これらの「賛」から抜きだした詞書きと、画面上の対応はどうなるのだろうか。
- 1 先ず場所は、徳丸ヶ原荒川沿岸、
- 2 絵図の(原の西隅)には五間の廠舎がつくられ、(絵図では一部だけみえる)
- 3 南には打小屋を作り、その内に臼砲、忽砲各一門を備付け、
- 4 外には白黒の外幕を打ち回し、
- 5 この打小屋の正面東に、四町目印の紅白標旗を立て、
- 6 原の南には(絵図上辺右)東北に面して幕張りした仮屋
- 7 仮屋の西(絵図では右)から二間、目付水野舎人・鉄砲方井上左太夫・田付四郎兵衛、その他御徒目付・御小人目付・与力等、⁽¹²⁾
- 8 仕切りがあり、その次、検分役吉川一学、後藤周防守、
- 9 次は、本多伊勢侯、酒井出雲侯、稲葉兵部少輔侯、稲垣若狭侯、加納遠江侯、渡辺丹後侯(「有坂本」のみ記載)、大田新六郎、加納和侯、堀若狭侯、松平内匠頭君、石川美濃守君
- 10 少し東(右)に離れ、別に青幕を打たせた仮屋には、松浦静山翁
- 11 持槍打物は、着座小屋の後に立て、
- 12 乗馬はその辺の樹陰に繋がる、
- 13 見物人は、原の三面に充満す、

- 14 「螺貝の合図で、モルチール砲(臼砲)三発」
- 15 「ブランドコーゲル(焼玉)二発」
- 16 「ホイイツスル榴弾二発」
- 17 「ドローフコーゲル葡萄弾」一発」
- 18 次に騎兵銃で往返発射、六発、
- 19 次に銃隊が銃をかかげ、整然と進み、三門の野戦砲は、中央と銃隊の両端に配置し、「全隊見分之廠舎の前に並び、銃剣を収め、」
- 20 三門の野戦砲が交互に数発を放つ、
- 21 「各種の銃陣による打方を演じた」
- 22 第一隊長高島秋帆は、弦月の紋を付けトンキョ帽に淡紅の筒袖に袖袴をはいて采配を持ち、
- 23 指揮棒様のもを、かざすは副隊長市川熊男、
- 24 日脚を象どった紋のトンキョ帽は、第二隊長高島浅五郎、
- 25 遊撃副隊長山本清太郎、
- 26 背後で策を持つ副長野口善太夫、
- 27 騎乗して馬上砲を構えるのは、近藤雄藏、
- 28 三門の野戦砲の操作、各四名、
- 29 以上、「賛」から画面に対応する文言を抽出し、筆者による恣意的(誤読を恐れず)に、簡単な意識を付した。(同数字同志が対応する)

四 「賛」と絵画表現との対応関係

この絵図に描かれた主要テーマは、高島秋帆による洋式砲術・銃隊による銃陣変換・騎兵による馬上射撃である。

所庄吉氏は「徳丸原の演練をみると、騎兵による馬上銃放発に始まり、野戦砲の砲撃に続いて銃隊の陣形変換と一斉射撃が行なわれ、一応は歩・騎・砲の三兵を紹介しているが、決して三兵による連合戦法とい

えるものではない。もともと秋帆は騎兵についてあまり効用を認めず、専ら歩・砲の二兵の効用を重んじた。これは彼の認識不足というより、わが国のように狭隘な地形の国土においては、騎兵の活動が著しく制限されるのみならず、むしろ行動の障害になると考えたのではなからうか。(中略) それでも歩・騎・砲三兵による連合戦法を紹介したことがいかに画期的なものであったかは、旧来の兵制と比較すればあまりにも明らかである。」

また、熊澤徹氏は「(略) 高島流砲術の特徴は、大砲とくに榴弾砲の使用と、密集部隊による小銃の一斉放射・(集団的な) 操兵の妙にあったと言われる。」

長々と両論文から一部を抜粋したのは、読者に供するよりも筆者自身が、先学の研究成果を学び、秋帆による「調練」とは、どういう歴史上の意味があったかを確認したいがためである。

この絵図が、歴史的対象の一齣を描いた記録―視覚化された画像である以上、「調練」の状況がどう形象化されているか、を考察してみることにする。

まず大砲類であるが、画面に描かれたモルチール(臼砲)、ホイッスル(榴弾砲)、野戦砲等は細緻にわたりかなり正確に表現されているとおもわれる。石田千尋氏は「鷹見家資料の中に『天保十二丑年春 和蘭ホイッスル筒図・モルチール筒図・野戦筒図外ニハンドモルチール図』と表題された一袋十葉からなる史料」を紹介されている。ここには「高島秋帆がその徳丸ヶ原演練に使用するために長崎から江戸に持ち渡った洋式砲の図面とその彫物の拓本であった。それは高島秋帆より在府長崎奉行田口喜行の手を経て天保12年4月10日に鷹見泉石の手に渡った。」ことが論証され、モルチール図面・ホイッスル図面・野戦砲図面などを掲載されている。

〔図6〕は、大東急記念文庫所蔵になる稿本で、「徳丸原」で行なわれた「調練」を実見して、筆録されたものと推定される。単に大小筒・馬上砲などを図解し、その仕様を記しただけではなく、その構造と使用法を懸命に看取しようとしているのが、書込みなどによっても窺われる。

石田氏の紹介になる前記の「図面」、及び「試銃一見録」にもとずいて「有坂本」にあたると、相当正確に大筒等が描き表わされていることが解る。画面右下隅の打小屋前に据えられた砲は、モルチール砲とホイッスル砲であると思われる。モルチール砲は臼砲椅(モルチールスツール)の上にセットされ、ホイッスル砲は攻城砲車(ベレーゲンク・アホイト)と思われる砲車に乗せられている。画面中央の三門は明らかに野戦砲で、野戦砲車(ヘルドアホイト)は本絵図のほうに「試銃一見録」図よりも正確といえる程である。

以上みてきたように、当日の「調練」の場景がほぼ全部画面に収められている。画面右下(臼砲・榴弾砲)の位置から斜め左上に向けて伸びる銃隊の列、その先端の野戦砲と、騎兵を結ぶ不平等三角形で構成された構図が、絵画的表現として「集団戦法を旨とする西洋流銃陣」が形象化されているのではないだろうか。また、「有坂本」には秋帆の姿が二つ描かれている。第一は、打小屋前の臼砲・榴弾砲の側に立つ秋帆。第二は、野戦砲打ちを指揮する秋帆。これはトンキョ帽・服装ともに同一であり、既述の如く調練の時間的経緯からみて「異時同図」として描かれている。

「有坂本」にはあまりにも当日の調練の状況が精確に、かつ克明に描かれている。これは明らかに「調練」の場景を画像として形象化し、絵画表現として集めたものである。

「古賀本」・「長崎本」などは、墨画淡彩で描かれ、「調練」の場景

を絵画として記録・形象化するという意図よりも、一幅の絵画として造形した意図が、その構図などに看取される。また、洋風画法の遠近法によって、渺茫と広がる「徳丸原」の相貌を巧みに描写している。

五 諸本の制作時期と絵師

かつて筆者が「有坂本」を模写させていただいた時の直感的印象は、これを描いた絵師が個々の被写体をよく調べて描いたのだと感じた。また、或は砲術関係のことも熟知した絵師が描いたのではないかとも思ったものである。つまり「調練」の情景を感覚的にとらえた表現というよりも調練の内容を精密に絵像として集大成したという感を深くした。また「有坂本」の賛の筆蹟は、端麗な楷書で書かれている。この賛の詞書きの後半部は徳丸ヶ原調練に参加した銃砲隊員名が記されているが、「古賀本」「長崎本」の賛の人数と比較して、「有坂本」には二十二名程多い人名が記載されているのは、どういふことだろうか。筆者には判断がつかかねる。「古賀本」「長崎本」の作成に後れて参加隊員名を追加して作成されたとすれば、「有坂本」は、前者より後の制作時期が想定される。

「有坂本」「古賀本」「長崎本」の絵師は、荒木千州といわれている。「高島秋帆先生追遠法会記事」口絵図版の解説で荒木千州筆とされているのが、管見によれば今のところ本書が初出で、これが何にもとずいて書かれたのかは、判断できない。古賀十二郎氏は『長崎絵画全史』⁽¹⁷⁾のなかで、「天保十二辛丑五月九日（一八四一年）高島秋帆が、江戸郊外徳丸原に於て洋兵術演習を行ふ際には、荒木千州も、高島氏の門人であったので、之に参加し、其演習の図を作った。」と書いている。また、その画風について「千州は、唐絵北宗風や南宗画はもとより、洋画にも多少意を留めていたようである。或は洋画家原南嶺などにも接近し

て、多少その感化を受けたのかも知れない。千州の遺品の中に原南嶺の唐絵や紅毛絵の粉本がある。彼は、人物の描写に、よく洋画法を利用している。（略）其外、弘化以降千洲の作った画の中には、洋画法を加味した者を認むべきものが少なくないやうである。」と書かれている。双樹園生は「画人高島秋帆」⁽¹⁸⁾のなかで「天保十二年、武州徳丸原で行なわれた砲術操練の光景を描いた横幅があり、その筆者は、続長崎画人伝の著者であり長崎鑑画職を命ぜられていた荒木千州であるといふ。」と記述している。

古賀十二郎氏は絵図の作者を荒木千州であると断定している。しかし、注（2）の如く古賀氏が荒木千州筆としているのは、西本米吉氏所蔵本と成田陸軍少将所蔵本を指している。氏は、『徳丸原演習図』は、当時演習に参加せる人々、其他の需めに応じて千州が作ったのであるから、若干あった事と思われるが、……二通りあるのに過ぎないやうである。」と書かれている。長崎絵画全史は一九四四年（昭和十九年）に発刊されたものである。秋帆の追遠法会が一九一七年（大正六年）⁽¹⁹⁾に行なわれた際に、古賀氏自身所蔵の「古賀本」と「有坂本」が出陳されている。そうであるなら、古賀氏は当然「有坂本」の存在を存じている筈と思えるが、『長崎絵画全史』では、前述の如く千州筆として西本本、成田本のみを記しているだけである。

古賀氏が「長崎絵画全史」「長崎画史彙伝」で記述された「西本本」「成田本」は、何か「長崎本」「有坂本」との関係を連想させるのは思い過ぎだろうか。古賀氏が述べられた荒木千州の画風の特長は、「古賀本」「長崎本」「有坂本」の画風にもあて填るように思われる。諸本が千州筆とするのも故なしとしない。

これらの絵画群が作成された時期は不明であるが、筆者の想定は次の三期のいずれもが可能性が高いと思われる。

(一) 天保十二年五月徳丸原訓練から、同十三年十月秋帆逮捕までの期間。

(二) 弘化二年九月水野忠邦、鳥居耀蔵らの罷免、削封から、弘化三年七月秋帆処罰までの期間。

(三) 嘉永六年八月秋帆釈放以降。

絵図群は秋帆が行った一つの社会的事件を肯定的に描いたものであり、この事件が、社会的政治的条件の変化によって抑圧または否定される状況になれば、絵図群の作成は困難になる。従って期間(一)の場合が微妙になるが、「秋帆に対する取調べは、元来虚偽の告発によるものであったため、遅々として進まなかった。そして、上知令の紛糾から天保改革は挫折し、天保十四年閏九月十三日水野忠邦が退陣した。翌弘化元年(一八四四)八月六日には、鳥居耀蔵も町奉行を罷免されるにいたり」⁽²⁰⁾絵図の作成される可能性の高まった期間といえよう。

必ずしも右の期間だけとは限らないが、この三期間に作られた可能性が大きいものと推考できるだろう。

六 高島流砲術伝播と絵図

「旧有馬本」は前記三絵図に比べて絵師(不詳)は明らかに異なり、画面は平板で遠近法等の洋風の表現はみられない。文人画風の筆致で墨画淡彩で描かれており、既述の三絵図とは明らかに作風が異なる。然し、次節で紹介する「銃銃一見録」附彩色絵図も含めて、これらの絵図は皆同位置からの俯瞰の構図である。訓練の行なわれた情景を勘案すると、この位置が好適の位置かも知れない。この絵図は「有坂本」と比べると図柄は少し省略されている部分もあるが、それらを画中に書き込みで補っている。「訓練」に関しては大砲の射撃にふれ、小筒の「西洋セキチン打之法」に「繰り掛ノ陣法ニ似タルモ人数ノ配り積疊ニシテ発煙

モ稠密ナリ」と解説し、近藤^(マユ)祐蔵による馬上の妙芸を記載し、「諸士出立装束」を簡単に述べている。本図には「騎兵による馬上射撃」は絵像としては描かれていないが、「書き込みによる馬上射撃」と「砲術」「銃陣」の三者で、「三兵戦術」を構成する絵図になっている。

この絵図の左端に書かれた「賛」は、「有坂本」等の三絵図とは異なり、「西洋近時ノ新真法又銃陣ノ妙秘ヲ極メ」た秋帆の偉業を称え、「今此図端ニ聞ク所ノ顛末ヲ記シテソノ概ヲ伝フト云」と結んでいる。ここで、この賛のなかで興味を引かれるのは次の文言である。

右銃陣法ハ(略)秋帆ニ至テ紹業精勵尤モソノ巧ヲ極メ猶且ツ深ク不久ノ意ヲ懐テ精藝ノ人ヲ求メ就テコレヲ講習シ諸流ヲ會シテ其濫奥ヲ究メ遂ニ大成ヲ致セリ(略)「以下割書」西洋ニ日本アルコトヲ知リシハ「マルチン」ノ地理書ニ依レハ僅ニ今弘化二年ニ至リテ三百四十六七年ニ及ヒ、「ホルトガル」人我日本種ケ島ニ来リ砲術ヲ開キンハ今弘化二年ヲ去ルコト三百七年ニ及ブト見ユ、日本史ニ高倉帝ノ朝伊豆ノ國司ノ奏ニ番船敵島ニ上陸ス(略)今弘化二年ニ至テ六百七十余年ニ及フ、津田鳳卿本朝火術ヲ見ルノ初メトス

津田鳳卿によると「マルチン」の地理書に日本の存在が記されてから今弘化二年で三百四十六七年、「ホルトガル」人が種ヶ島に鉄砲を伝えたのが今弘化二年を去る三百七年前、高倉帝ノ朝伊豆ノ國司ノ奏上に蕃船敵島に上陸してから今弘化二年に至りて六百七十余年に及ぶ―これが津田鳳卿が本朝火術を見るの初めとしている。ここでは「今弘化二年」を基準として記述されている。そうするとこの「賛」が書かれたのは弘化二年ということになる。この絵図の制作期は、弘化二年とみてよいだろう。既述の如くこの弘化二年は制作し易い政治的状況があったわけでもある。

この賛の書かれた時期が弘化二年とすると絵図も同時に描かれたとみ

るのが通念的な理解としてもよいであろう。絵図で事物を具体的に形象化する場合、その対象が運動と機能的働きのあるものであるときは、絵像だけで正確に伝達することはかなり困難であり、文字による説明を加えてこそ、より一層豊富な内容を伝えることが出来ると思われる。「旧有馬本」はこの意味で、黒田日出男氏の「史料分類表」に当て嵌めれば、アナログ・デジタル史料(画像・文字列史料)と云うことになるか。

〔実践としての情報収集〕

「金沢本」は明らかに「旧有馬本」の模本である。「旧有馬本」の成立時期が弘化二年とすると、当然、この模本は弘化二年以降ということになる。この絵図は「旧有馬本」と絵柄はほぼ同じであるが、かなり簡約されている部分があり、表現も稚拙である。画中の書き込みも減らされておき、絵画作品というよりも、高島流砲術調練の参考図的な資料として作成されたかの感がある。「金沢本」が転写され河野家に伝わった経緯はよくわからない。

ここで、金沢市立図書館所蔵河野文庫架蔵の田原藩土村上定平(範致)の書簡を紹介し、金沢藩に高島流砲術が導入される過程を研究された岩崎鐵志氏の論文(23)を道標として、「金沢本」がどのようにして河野文庫に伝播されたのか、を推察する。「……河野久太郎が高島流砲術という新しい知見に魅せられていくのは、天保一二年(一八四一)の武蔵徳丸原における演練を伝聞したからにちがいないであろう。」金沢藩陪臣河野久太郎(通義)と村上定平との出会いは「弘化二年(一八四五)八月六日であった。」「村上定平は書信を通じて高島流砲術の精神や西洋兵学書の原書・翻訳を案内した。」「河野久太郎もこの精神を受け入れ、先述の各書状によれば、江戸詰の諸氏に原書・翻訳書・写本の購入蒐書を依頼していることが判明する。」河野久太郎が高島流砲術を導入するための

過程が氏の紹介された村上定平等の書簡によって推測できる。このなかから「徳丸原調練」に関する書簡の一部を再録させていただく。

嘉永元年八月二十六日 河野久太郎宛 村上定平書簡

一御質問書之内

高島流ニては装束星幕之定も有之候趣

ニ候得共、決て四郎太夫之趣意ハ左様之訳

ニ無之、尤、徳丸原点查之切ハ装束も

筒袖の胴着ニ、タチツケを着し申

候。星幕も赤白五尺四方の學交セ、

目印は赤白の流し旗ヲ用ひ申候へ共、

是ハ其時の思ひ付ニて、平日右様致し

候と申ニは無之候。尤銃鍊ヲ致候ニは

股引か、タチツケの方、都合宜敷と

奉存候。(以下略)

八月二十六日

村上定平

河野久太郎様

御左右中

右の書簡の一部は「徳丸原調練」のときの服装や砲撃目印のことについての応答なので転載した。「河野文庫」に架蔵される前記「書簡」によれば、河野久太郎が砲術関係の情報の収集にいかに関心していたか理解される。残念ながらこれらの書簡のなかには「金沢本」に関しての記載はない。然し、この絵図が河野久太郎の砲術関係の資料・情報収集のなかに含まれていたであろうと、推測できるのではないだろうか。

〔知的関心にもとづく情報収集〕

「試銃一見録」に付随する「彩色絵図」には、画像として情報は余り

描かれていない。専門の絵師の手に成るものとは思えないが、大らかに稚気を感じさせる。諸役人見分小屋は区画されて、身分、役職名が記入されており、横浜開港資料館保管「天保十二年五月徳丸原ニ長崎地役人高島四郎大夫打様之玉附図」の記入と一致する。この「彩色絵図」の左側には銃隊員が大きく描かれており、稚拙な描き方ではあるが、秋帆の考案した服装を描いた貴重な画像と云える。「一章」で既述)

この「試銃一見録」と「彩色絵図」は伴信友の所蔵に掛るものであるが、これらの資料がどういう経緯で信友のもとに家蔵されたのであろうか。「試銃一見録」は渡辺権太夫が「徳丸原調練」を実現して記録したものである。これらが渡辺権太夫による自筆稿本なのか、或は伝写本なのか筆者には判断出来ない。作成された時期は当然秋帆による「調練」が行なわれた直後と考えるべきだろう。信友が単なる好事家的関心でこれを集めたとは思えない。激動する政治的状况にも関心を示した信友の政治情報の手経路の一面として、伴信友に宛てた長澤伴雄の書簡の一部分を次に転載する。

〔天保十四年〕

〔略〕高嶋四郎大夫事、もはや御知忌と存候。三月中旬比にかありけん、伏見通行にて候。同人初余党十七人中に、丸山の妓初紫といふ美婦も有之候よしニ候。罪の実説トントわかり不申、軽からぬ事とハきこえ申候。聞きはつり候事も候へども、申上かね候。(略)外庄が強まり、不安定化した政治状況のなかでは、幕末の知識人にとっては、文化面や政治面での情報が強く求められたのであろう。信友の「砲術」への関心が奈辺にあったか付度できないが、単に知識的関心だけだったのだろうか。

まとめにかえて

「清晨に始まり、午に既に畢る[※]」。秋帆による「徳丸原調練」は成功裡に終わった。しかし日暮に到るも筆者にとっては不明の点、未解決の問題点が多すぎた。本稿の予定紙幅が大幅に超過しているが、少し補足する。

(一) 絵図群が作成せられた理由の一つには「調練」参加者及び、高島流の伝承者からの要請が考えられる。「有坂本」の場合は、有坂淳蔵・有坂隆介・井下彦四郎の父子三名が参加者であり、これが有坂家に伝来されている。『長崎絵画全史』所載(注2)の「西本本」は、浅井理三郎(調練参加者)旧蔵に掛かり、「成田本」では、鳥居計七・計八兄弟(高島流の伝承者)の弟計七が成田正峰陸軍少将の祖父である。このように調練参加者の家系に伝来されたものがある。

(二) これらの絵図群は歴史的な絵画資料として貴重なものであるが、一幅の絵画としてみる場合は、どのように評価し、美術史的に位置づけられるか―例えば様式変遷史的側面を重視した観点、或いは歴史的記録画とでも云う概念―非常に難しい問題である。

(三) 模写本と原本とに関しての考察まで及ばなかった。

現状の正確な記録としての模写本の作成は重要である。しかし、筆者は模写の本質を技術的な面のみに矮小化してみるのは一面的になると考える。模写とは伝統的技法を用いて原本を忠実に写す作業であるが、この過程は模写者の目を通して感じ取られた内容の再創造でもあり、科学的複製技術によって作られたものと異なる魅力を醸し出しているからである。

〔後記〕

本稿の執筆にあたり、御高配を給わった次の資料所蔵者の方々、

並びに諸機関に厚く御礼申し上げます。有坂純一氏・酒川玲子氏及び横濱開港資料館・長崎県立長崎図書館・長崎市立博物館・金沢市立図書館・大東急記念文庫・松月院・板橋区立郷土資料館・岡山大学附属図書館・東京大学史料編纂所。

また、柿沼徹氏には資料の収集やワープロ打ち、適切な御助言等、紙舌には差し難い多大の御援助を給わった。この稿は氏の御鞭撻、御協力なしに成らなかつたものである。草稿に目を通し構成など、手直し、ワープロ打ちまでして下さった林讓氏、草稿の誤謬を正して下さった宮地正人氏、以上の方々に感謝申し上げます。掲載写真の撮影には吉田成氏に大変御面倒をお掛けした、また「試銃一見録」の撮影は宮本雅弘氏の御厚意によるものである。記して両氏に御礼申し上げます。

[注]

(1) 本図は、調練当日の大筒による射撃の着弾点と炸裂の状況を図示したものである。諸役人見分小屋には身分・役職等による区分けが示されており、前記の絵図群と性格は異なるが貴重な史料といえる。

(2) 古賀十二郎「長崎絵画全史」 北光書房 一九四四年

高島秋帆徳丸原演習図 荒木千洲筆 長崎、西本米吉氏所蔵。もと高島秋帆門人浅井理三郎の所蔵に係るもの。

荒木千洲筆 東京、成田陸軍少将所蔵。秋帆門人近藤雄藏騎馬のさまが描写してある。

山根寿信編「高島秋帆先生追遠法会記事」 一九一八年

徳丸原練兵図 出品人 古賀十二郎 (筆者注・前記の「古賀本」)

図は徳丸原演武に参加せし荒木千州号野鶴の写す所図中采配を手にするは秋帆先生にして大砲の傍に梶の葉の紋章ある軍帽を冠むれるは大木藤四郎なり。

徳丸原演武図 出品人 有坂勉 (筆者注・前記の「有坂本」)

図版の下の説明文に「此図筆者ハ銃隊員トシテ参加セル荒木千州号野鶴ノ写ス処ト云フ……此図ト大同小異ノ図尚二種世ニ存ス」とある。

徳丸原演武図(模写) 出品人 石山義完

幕府の召に応じて上府し徳丸原に於て操練砲術の状を実写せしものなり。

(筆者注・右は大正六年五月二十日、本郷駒込大円寺で行なわれた秋帆の追遠法会の折、関係遺品等の展覧に出品されたものである。)

(3) 「四方の道草」(遠藤早泉『高島秋帆』所収)

(4) 江戸叢書巻之一「嘉陵紀行第三篇」所収

(5) 武州西台於徳丸原・高島流砲術稽古業書(試銃一見録)(稿本・絵入)

附(彩色絵図) 大東急記念文庫所蔵

徳丸ヶ原における秋帆の「調練」の次第の見聞記録で、その時使用された大砲・小銃・馬上砲・鞍・トンキョ帽等の施用を図解したるもの。克明に観察し、説明が記されている。

「天保十三辛丑五月九日武州豊島郡西台徳丸原ニ而阿蘭陀流砲術初而御目付方御見分有之罷越一見之儘記置之 *渡辺権大夫」

末尾に「信友写図」とある。

*渡辺政挙(通称権大夫、号庫山・白翁、小浜藩士、山口菅山門下)

*絵図の裏書 福井縣若州遠敷郡雲濱村 伴 信興 秘藏印

「試銃一見録」のなかに挿絵ありて、棍棒よろのものを図示し「洗カルコ先ニ切レヲ糸ニテ巻付タリ」とあり、大筒の発射操作を次の如く説明する。「大筒打放ス直ニ一人洗カルコニ水桶ノ水ヲ付巢中ヲ洗ヒ。一人直ニ紙袋ナリニ玉薬ヲ込ミ。一人指揮スルニ随テ指火スル也。」

(6) [図7] 横濱開港資料館所蔵 (前出)

この絵図には八丁目印が書かれている。立看板様のもので「高一丈・横六尺」縦に朱線が太く二条入っている。

(7) 勝海舟「陸軍歴史」上巻「高島四郎太夫火業打試之儀ニ付奉申上候書付」丑六月 井上左太夫

- (8) 「試統一見録」には次の如き記載あり。「服ハツムホウ ボタンジメ立付ケノヤウナルモノ着用ス云々」(傍点引用者)
- (9) 勝海舟『陸軍歴史』上巻「同年五月九日於武州徳丸原西洋流砲術業書」
- (10) 山本晴海

〔長崎県人物伝〕(臨川書店)晴海、名は逸、字は無逸、通称清太郎、秋村又は淡齋と号す、後諱と字とを兼ねて晴海と改む、文化元年二月十七日生る、長崎奉行組下、船番職竹内良太夫の長子なり、(略)西洋流砲術を高島秋帆ニ学びて、(略)西洋砲術を江戸徳丸ヶ原に演ずるや、晴海その副將たり(略)

- (11) 遠藤氏は、秋帆が幽囚中に山本晴海宛に送った書簡(年不詳十一月朔日晴海宛)から「賛」の筆者を推定している。

〔略〕先便にも御礼申候と存候。御文章結構に出来後世迄此無学老人学者の様に相聞へ難有候。御蔭に而倅や孫杯学問出来候得は此老も猶更学者の様に被思候。莫議杯之内何人の評か知らねとも秋帆は加様々々杯と能く我に代而侮を防呉候様に而秋帆の粗号も人も承知呉候事と是又喜候。〔而して此の手束に於て、秋帆が秋村に厚礼を与へたのは何であつたか、或は荒木千州の描いた徳丸原試砲図に賛した『高島秋帆翁試砲于江府図記』ではなかつたらうか。〕

- (12) 〔通航一覽統輯〕附録卷二十三海防砲礮部稽古附角場
天保十二辛丑四月廿四日長崎町年寄高島四郎大夫徳丸原に於て火業打試あるにより砲術家御先手組御持組与力等に見分を命せらる。
天保十二辛丑四月廿四日御先手方廻状

一、今度諸組与力格長崎会所調役頭取高島四郎大夫、武州西台於徳丸ヶ原火業打試候ニ付、拙者共組与力依田大助・依田大三郎・浅羽善之助・中嶋茂一郎、右場所江罷越可致見分旨越前守殿被仰渡候段、掛り御目付水野舎人より達有之候間其段申渡候、此段為御承知致、絨添候、以上、

四月廿四日

三嶋下野守

大屋図書

西丸其格通

玉井藤右衛門
石川与次右衛門

- 一、御持与力時曆作御用手段出役渡辺庄左衛門自注目付堀田主税組与力斎藤雲八郎も同様見分被仰付候よし、

○右の記録によると「見分」に行つた与力名が記されている。

- (13) 所莊吉「砲術と兵学」(中山茂編『幕末の洋学』ミネルヴァ書房、一九八四年)
- (14) 能澤徹「幕府軍制改革の展開と挫折」(『シリーズ・日本近現代史』1 維新変革と近代日本)岩波書店、一九九三年
- (15) 石田千尋「鷹見泉石と洋式砲」(『泉石』第1号、古河歴史博物館、一九九〇年)
- (16) 荒木千州。嘉永四年九月刊の「続長崎画人伝」(坂崎坦編『日本画論大観』中 一九二九年)は次のように記す。
「字世萬、号千州、又号春潭、少師事於鶴洲、親伝其法、能画人物花卉鳥獸、間作山水、其為人温藉恭順、苟不_レ欲逆_二於人_一、乃為_二高貴見愛稱_一焉、嘗繼_二父後_一為_二鑿画職_一」
- (17) 注(2) 参照
- (18) 双樹園生「画人高島秋帆」(『長崎談叢』第三十三輯 一九四三年 雄松堂)
- (19) 注(2) 参照「高島秋帆先生追遠法会記事」には展覽出陳遺品に解説が付されて掲載されている。
- (20) 仲田正之『江川坦庵』(吉川弘文館 一九八五年)
- (21) 津田鳳卿 安永八年(一七七九)―弘化四年(一八四七)
加賀藩士、通称亮之助、梧崗と号す。享和三年六月擢んでられて学校読師加人となり、大日本史の校訂および註釋を命ぜられる。(石川県史要)
- (22) 朝日百科「絵画史料の読み方」朝日新聞社
- (23) 岩崎鐵志「高島流砲術の伝播と展開―金沢藩壮猶館の場合―」(中山茂

編『幕末の洋学』ミネルヴァ書房 一九八四年)

(24) 岩崎鐵志「高島流砲術伝播の研究―村上定平の書簡―」(『静岡女子短期大学研究紀要』第十六号 昭和四十五年三月)

岩崎鐵志「高島流砲術伝播の研究―金沢藩陪臣河野久太郎(通義)宛書簡―」(『静岡女子短期大学研究紀要』第二十号 昭和四十九年三月)

(25) 注(5) 参照

(26) 大鹿久義『伴信友来翰集』(錦正社 平成元年)

長沢伴雄 本姓吉岡 通称十藏・衛門 号絳石舎

紀州藩士長沢六郎養嗣 本居大平門下 安政六年十一月没 五二歳

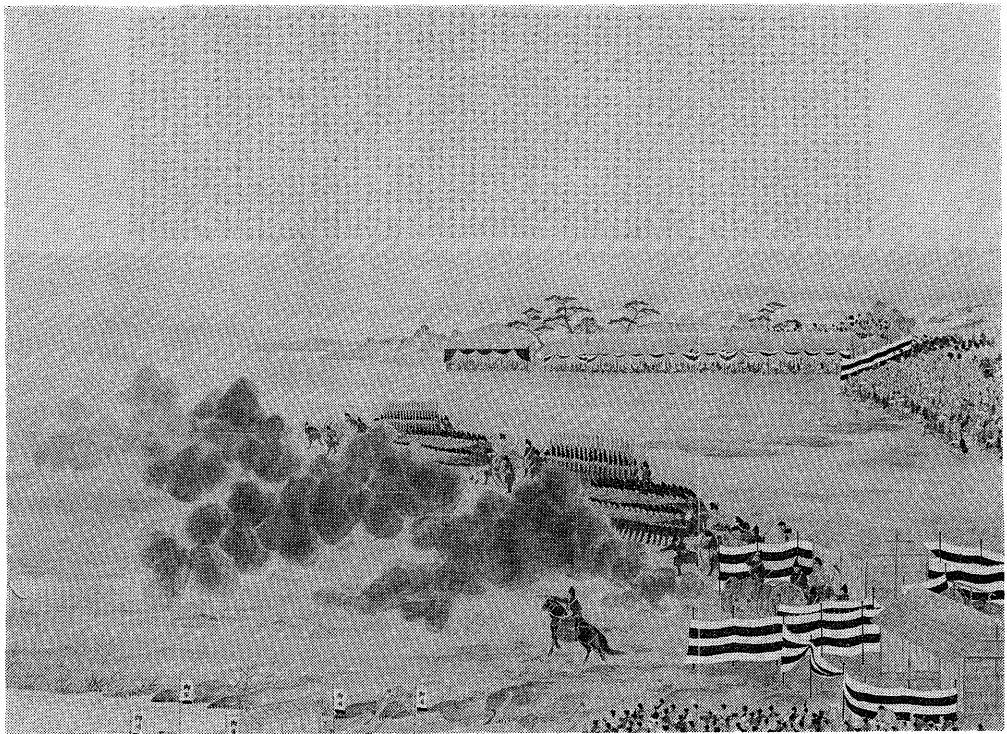
(※) 『謙堂日曆』6(平凡社 一九八三年)

天保十二年五月九日、陰、冷、細雨。(略)この日、高島四郎大夫、洋兵を徳丸原に演ず。我が嗣君往きて観る。清晨に始まり、午に既に畢る。

(補注) 「図7」について

岡山藩では一八五〇年(嘉永三)に西洋流砲術の導入が始まった。一八五三年(嘉永六)八月には第一陣として野田久之介以下九名の下士が西洋流砲術修業のため下曾根金三郎に入門を命ぜられた。(岡山県史)

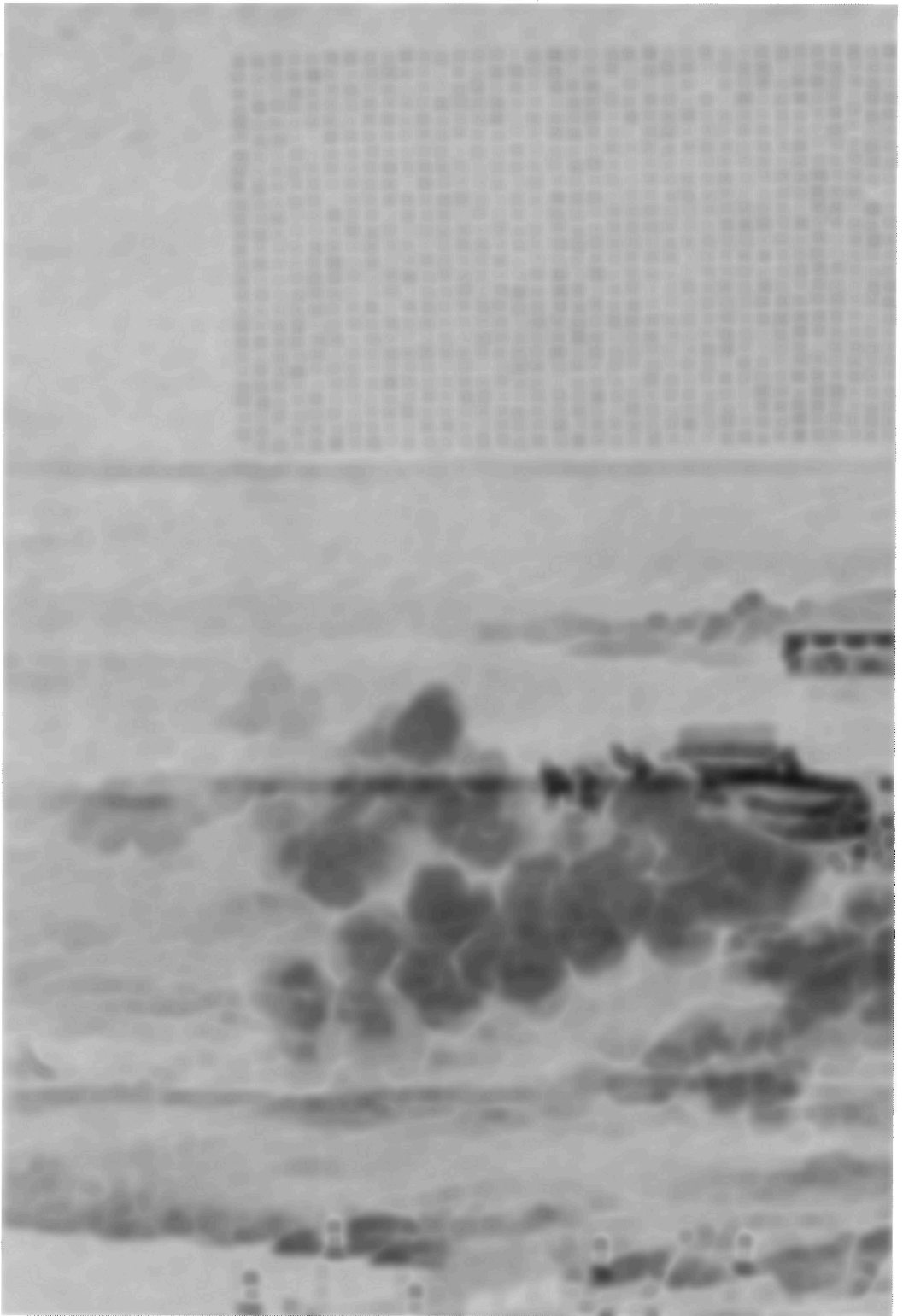
この絵図の作成は、この時期以降の幕末か或いは明治期の藩史編纂の過程で作られたものと思われる。本図の描法は「有坂本」系統のものである。見分小屋には役職名の記載があり、そのなかに「御老中之御嫡子」「御若年寄之御嫡子」などの書き入れがあるのは初見である。

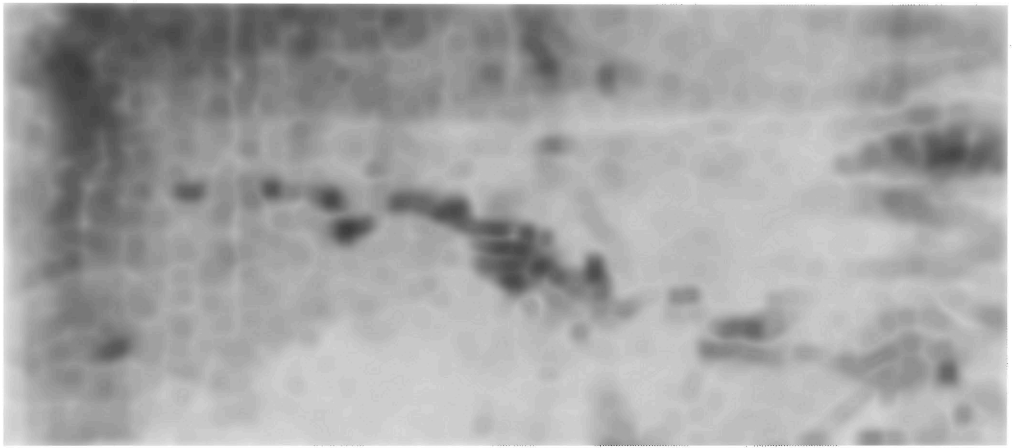


〔図1模〕 「有坂本・模写」東大史料編纂所蔵

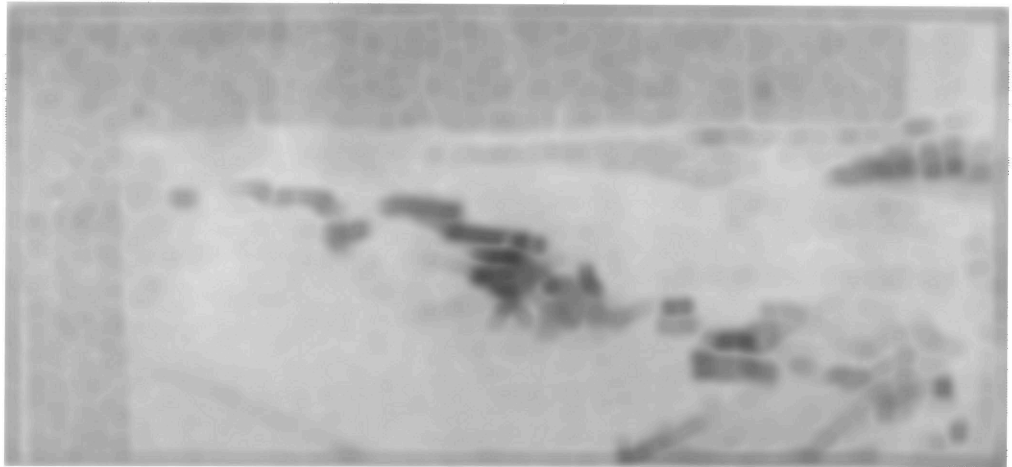


〔图1〕 「有坂本・原本」 有坂純一氏所藏

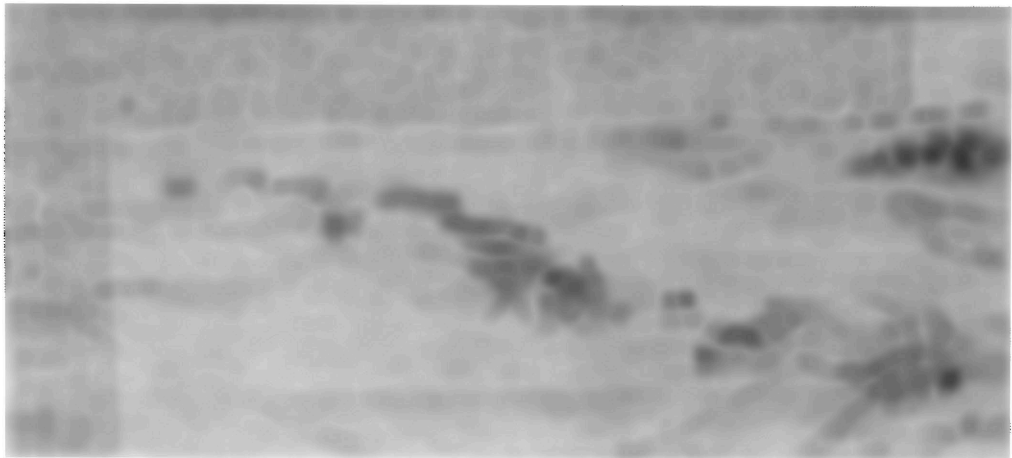




〔図2〕 「古賀本・原本」 古賀十二郎氏所蔵



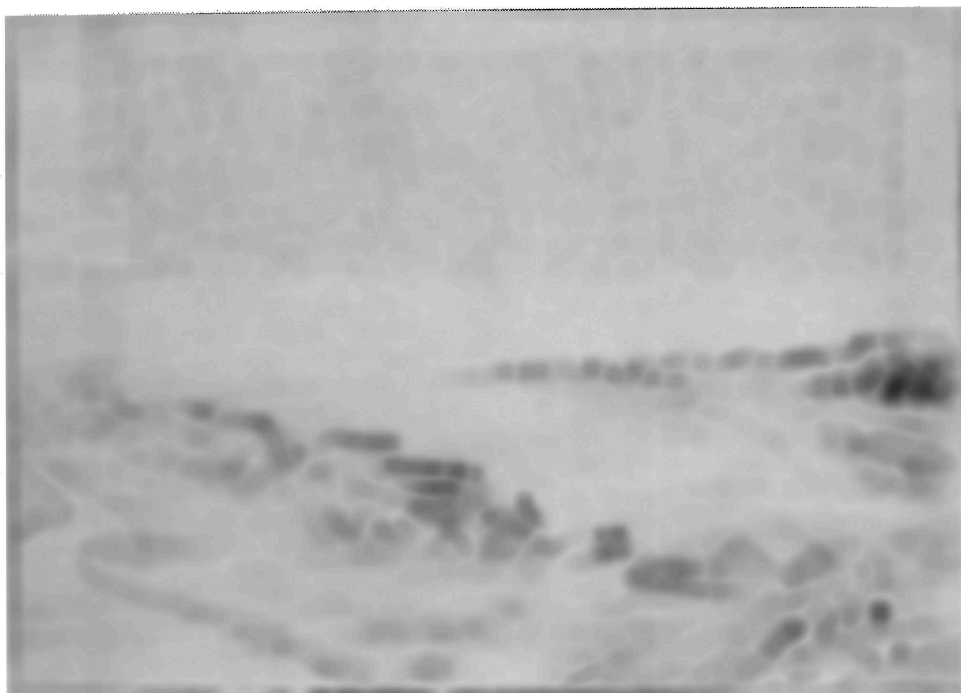
〔図2 模A〕 「古賀本・模写」 板橋・松月院所蔵



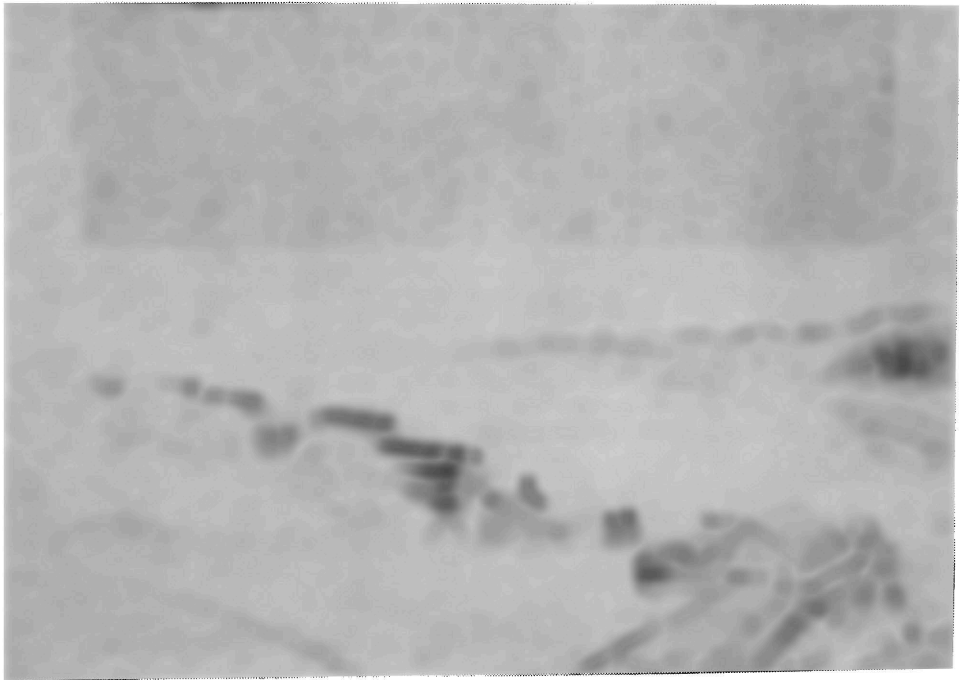
〔図2 模B〕 「古賀本・模写」 東大史料編纂所所蔵



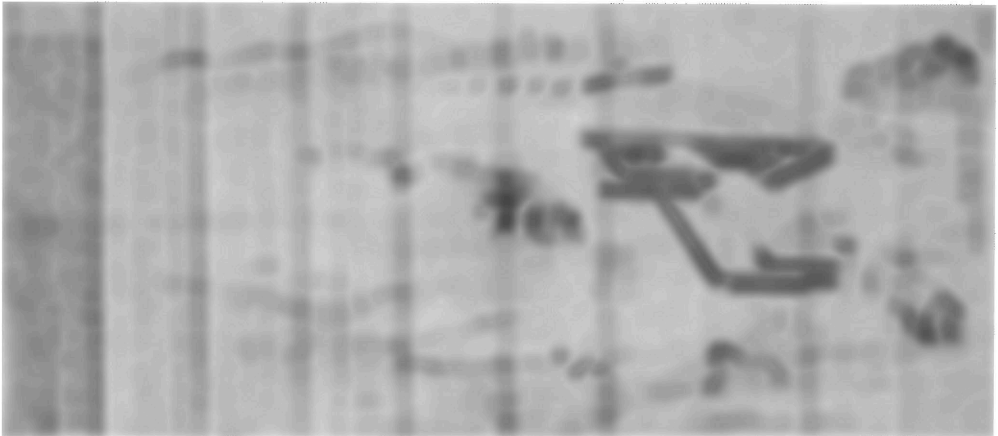
〔図3〕 「長崎本・原本」 長崎県立長崎図書館所蔵



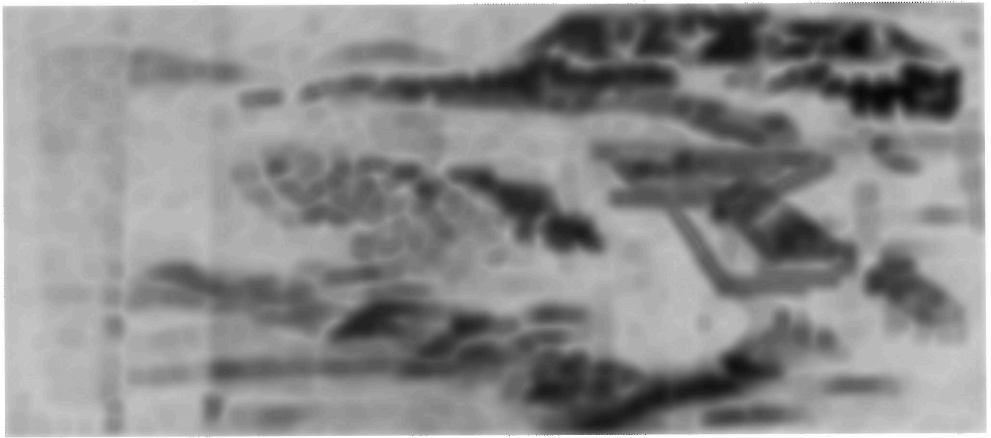
〔図3 模A〕 「長崎本・模写」 長崎市立博物館所蔵



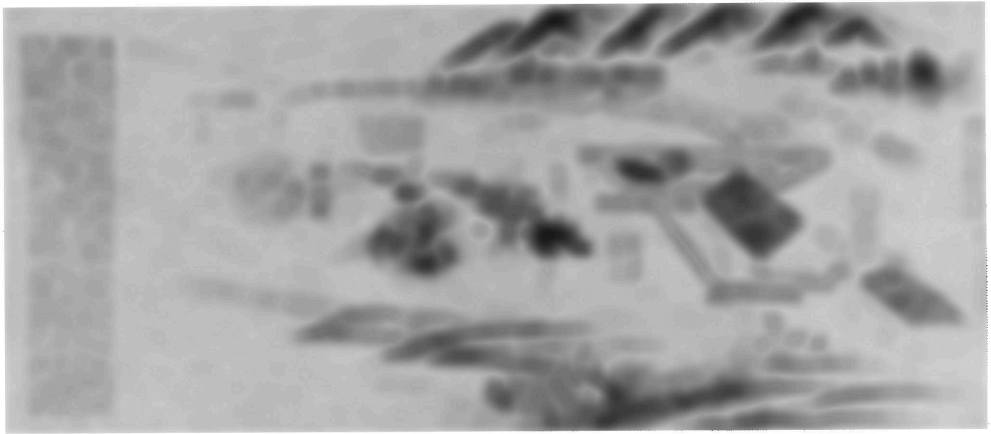
〔図3 模B〕 「長崎本・模写」 板橋区立郷土資料館所蔵



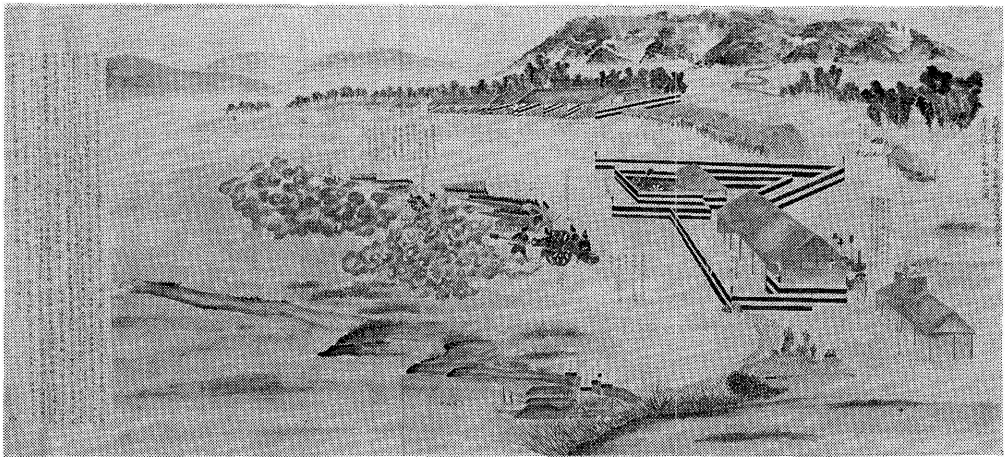
〔図5〕 「金沢本」 金沢市立図書館河野文庫所蔵



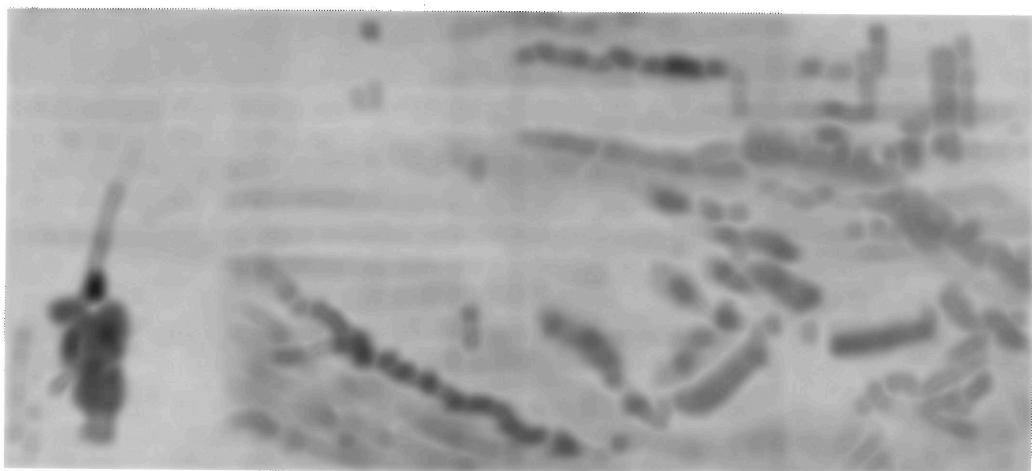
〔図4〕 「旧有馬本・原本」 有馬成甫氏旧蔵



〔図4模A〕 「旧有馬本・模写」 板橋・松月院所蔵



〔図4模B〕 「旧有馬本・模写」 東大史料編纂所所蔵



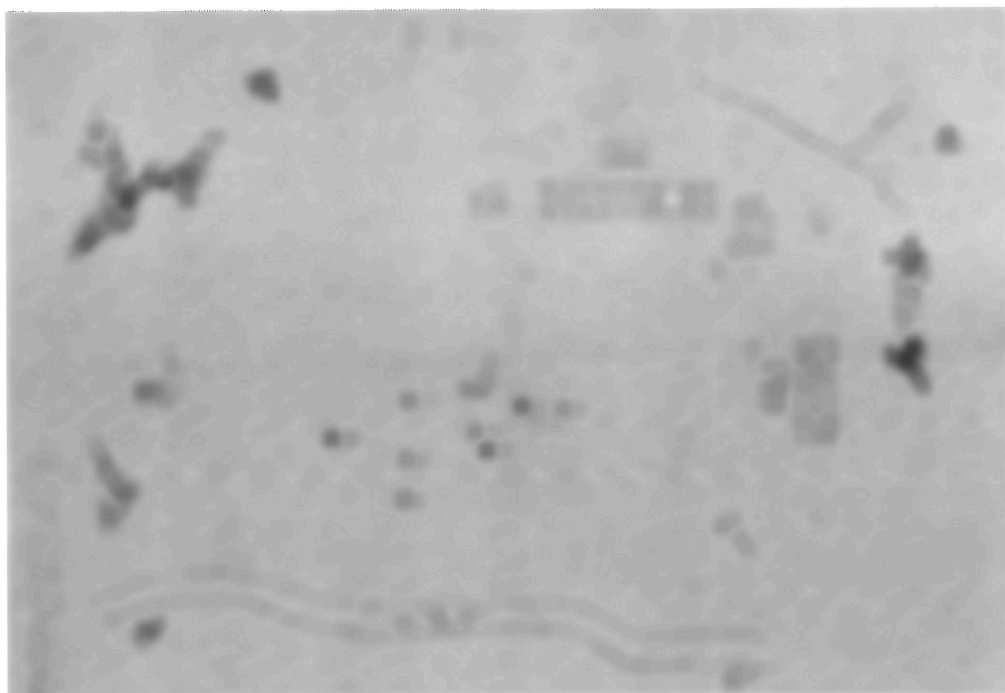
〔図6〕 「試銃一見録附彩色絵図」 大東急記念文庫所蔵



〔図6〕 「試銃一見録」(部分) 大東急記念文庫所蔵



〔図7〕 「岡山大本」 岡山大学附属図書館所蔵



〔図8〕 「天保十二年五月徳丸原之長崎地役人高島四郎大夫打様之玉附図」
(酒川玲子氏所蔵・横浜開港資料館保管)